



鉄道史学会

永江雅和著

『小田急沿線の近現代史』
『京王沿線の近現代史』

(小田急沿線)

クロスカルチャー出版 2016年3月刊
A5判 171頁 1,800円+税

(京王沿線)

クロスカルチャー出版 2017年4月刊
A5判 174頁 1,800円+税

特定の鉄道事業者をピックアップした図書を見ると、鉄道研究者が著者・編者・監修者であるケースも多い。自らの研究成果を社会に還元するときに、図書の刊行は重要である。そのなかで、農業・土地経済史の研究者である著者が鉄道史の図書を刊行するのは珍しい。これは、著者が専修大学経済学部の教員着任前の面接で、現在の進めている研究以外に将来手がけてみたい分野について問われ、学校沿線の地域開発についても研究したい旨を回答したことと、着任後、同僚の教授から『小田急電鉄沿線新聞』(2006年12月廃刊)に沿線地域のコラムの執筆をすすめられたことを契機としている。著者は小田急電鉄および沿線地域の歴史を調査するなかで、取り上げるトピックが次々に浮上することにより、小田急電鉄沿線の世界に惹き込まれていった結果、経済学部の開講科目「現代日本経済史Ⅰ」の講義ノートになった。『小田急沿線の近現代史』(以下、「小田急沿線」)はこの講義ノートを骨子に、新宿から小田原(＋箱根)へ向かって次の計12章で構成されている。

- 第1章 私鉄経営と沿線開発——「阪急モデル」と小田急
- 第2章 「副都心」新宿の形成と駅ビル建設
- 第3章 「ファッションの街」渋谷と代々木公園
- 第4章 世田谷の耕地整理と「学園都市」成城の建設
- 第5章 狛江市と「雨乞い事件」
- 第6章 生田村騒動と向ヶ丘遊園
- 第7章 駅前団地と多摩ニュータウン
- 第8章 町田の「三多摩社士」と玉川学園

- 第9章 「軍都」相模原・座間と林間都市計画
- 第10章 海老名と厚木の駅前開発
- 第11章 大山・丹沢の観光と小田急
- 第12章 小田原・箱根の観光と交通

また、『京王沿線の近現代史』(以下、「京王沿線」)は著者が『小田急沿線』の姉妹本として位置づけていることもあり、新宿から八王子へ向かって次の11章で構成されている。

- 第1章 京王沿線の歴史を知るためのキーワード
- 第2章 副都心新宿の形成と京王線
- 第3章 玉川上水沿いを走る京王線——渋谷区旧代々幡村地域の事例
- 第4章 近郊農村から高級住宅地へ——京王線と世田谷の風景
- 第5章 環状鉄道の夢の跡——帝都電鉄から井の頭線へ
- 第6章 「東洋のハリウッド」——京王線と調布市
- 第7章 南下する玉南電鉄——府中市と京王線
- 第8章 聖蹟とニュータウン——京王線と多摩市
- 第9章 稲田堤の桜と多摩丘陵の開発——相模原線と川崎市・相城市
- 第10章 動物園がやってきた——日野市と京王線
- 第11章 御陵線から高尾線へ——京王線と八王子市

「小田急沿線」と「京王沿線」の各章は、鉄道と地域(組織や住民を含む)の関係に着目していることが大きな特徴である。各章とも分かりやすい内容、読みやすい文章になっているため、評者は第1章、第2章、第3章……と読み進めていくうちに、著者の案内のもと、新宿から途中下車(＋タイムスリップ)を繰り返しながら、小田原や八王子へ向かっているような感覚になった。各章の内容は紙幅の関係から割愛するが、全体的に都市と観光を軸にした章が目立つ。これは、著者が阿鉄道の特色を記述するにあたり、都市と観光は重要度が高いと判断したためと考えられる。東京の副都心・新宿の形成、関東大震災(1923年9月)後に進行した世田谷の都市化、高度経済成長期の多摩丘陵での大規模な観光開発・住宅開発は

「小田急沿線」と「京王沿線」に共通するトピックであるが、本書を読み比べてみることで、両沿線の相違点と共通点を見つけることが可能になる。本書は多数の文献(著者の論文を含む)に依拠しているが、著者の研究室がある生田キャンパス(川崎市多摩区、最寄り駅:小田急電鉄小田原線向ヶ丘遊園駅)界隈はもちろん、当該沿線の各地域へ足を運んだことにより得られた知見が反映されている。

「小田急沿線」と「京王沿線」で評者が注目したのは、随所にみられる著者のユニークな考察である。例えば、「小田急沿線」の第1章の「私鉄沿線の風景」(2-3頁)では、野口五郎のヒット曲「私鉄沿線」(1975年、作詞:山上路夫,作曲:佐藤寛)を手がかりにして、「私鉄沿線」の風景がつくられた背景を、民間鉄道会社の取り組みとそれに対する地域社会の呼応から取り上げている。また、「京王沿線」の第8章の「多摩ニュータウン計画の浮上と大規模開発」(110-112頁)では、多摩ニュータウンを舞台としたスタジオ・ジブリのアニメーション映画「平成狸合戦ぽんぽこ」(1994年、原作・脚本・監督:高畑勲)の世界と重ね合わせながら、短期間の著しい景観変容に対する住民の反応を「狸が狐に騙された」と表現している。著者の幅広い教養に裏付けられた考察があることにより、本書の価値が高まっている。

もし、当該沿線地域の読者を対象に、本書の内容についてアンケート調査を実施すると、「知らなかった内容が多い」の声が多数を占めるであろうが、「知っている内容が多い」の声も存在するであろう。いずれの声であっても、本書は鉄道や地域を見つめ直し、鉄道と地域の連携を考えていくうえで、重要な役割を果たしてくれるに違いない。しかし、本書を読んで気になったことが3つある。

1つ目は、鉄道忌避に対する検証が十分でないことである。とくに、「小田急沿線」の第9章の「座間駅の設置と地元の反対運動」(107-109頁)では、小田原線の誘致が浮上した際に、座間村(当時)で地主百数十人が敷設に反対した理由を「若い者が町に出て行って身をつぶす」、「交通事故が多発する」、「百姓に電車は要らぬ」、「線路により耕地が分断され、交通も不便になる」、「鶏

が卵を産まなくなる」など、「言い伝え」をそのまま引用している⁽¹⁾。著者は「言い伝え」を「事実」として記していないが、1920年代も全国各地で鉄道誘致運動がさかんに繰り広げられていたように、地域社会では鉄道の有効性が認識されていた⁽²⁾。また、座間村以外の神奈川県内陸部の町村が小田原線の敷設に総じて協力的であったことを踏まえると、座間村での反対理由は不自然さが伴う。すでに著者は一次資料に近い根拠を提示することを研究課題に挙げている⁽³⁾。座間村で「言い伝え」が起こった背景を含めて、今後の研究に期待したい。

2つ目は、図と写真などの扱いが十分でないことである。図の場合、「小田急沿線」では、路線図(模式図的、イラスト付き)しか掲載されていなかったが、「京王沿線」では、路線図のほか、沿線地域の概要をあらわした地図が9枚掲載されている。地図にスケールバーが入っていれば、沿線地域の空間的な把握がしやすかったと思われる。また、写真の場合、「小田急沿線」も「京王沿線」も多く掲載されている。写真のなかには著者が入手した史料的价值の高い絵葉書も少なくない。可能な範囲で、各写真に撮影時期を示していれば、沿線地域の変容を理解しやすかったと思われる。

3つ目は、評者の無いものねだりかもしれないが、「小田急沿線」に、江ノ島線と藤沢市(片瀬・江ノ島地区)の内容が入っていないことである。これは紙幅の関係や、大矢愨三子氏の著書⁽⁴⁾の内容と重複するかもしれないと著者が判断した結果によるものであろう。しかし、高度経済成長期の初期、夏季の江ノ島線は小田急電鉄のドル箱路線であった。同線は海水浴客の利用で混雑が激しく、小田急電鉄が「すわってゆける海水浴」をキャッチフレーズに、輸送力の強化に取り組んだ事実⁽⁵⁾を踏まえると、入れてほしかった。

著者は「京王沿線」の「あとがき」のなかで、「近年の公共図書館や郷土資料館の置かれている状況、及び郷土資料保存に対する行政的サポートの貧弱さを顧みた時に、これら自治体の施設で刊行・保存されている自治体史や郷土史的業績の豊かさを紹介することに、本書のような著作の意義の一端があると考えられるようになった」(162頁)と

記している。この文章は、地域のあゆみをしっかり残していくことの大切さを指摘したものである。郷土史(誌)的業績は、鉄道敷設の反対理由の「言い伝え」を「事実」として記しているように、十分な注意を要するものが一部存在するが、地域の記録として貴重な史料である。これは、同じ地域で長年暮らす住民への聞き取り調査にも当てはまる。それゆえ、地域の記録を後世に残していくことは、これからの地域をつくるうえで不可欠な作業である。もし、行政的サポートの貧弱さが長く続けば、地域の記録が破棄されてしまいかねない。それゆえ、著者の指摘を自治体関係者は真摯に受け止めていただきたい。

最後に本書の内容に直接関係しないが、表紙のデザイン(著者の弟・永江智明氏が担当)について触れておきたい。「小田急沿線」は特急形車両・初代3000形の塗装(パーミリアンオレンジを基調に、灰色と白色の帯を配置)を、「京王沿線」は通勤形車両・初代5000系の塗装(アイボリーを基調に、えんじ色の帯を配置)をイメージしたと思われる。これらの車両は高度経済成長期に登場し、30年数年走り続けた名車として知られている。本書を手にしなが、懐かしさを覚えた当該沿線地域の読者も多いであろう。さらに、読者も著者も小田急電鉄と京王電鉄への愛着をいっそう深めたに違いない。

注

- (1) 加藤一雄「小田急よもやま話 上」, 多摩川新聞社, 1993年, 273頁。
- (2) 青木栄一「鉄道忌避伝説の謎—汽車が来た町, 来なかった町—」, 吉川弘文館, 2006年。
- (3) 永江雅和「私鉄会社による路線・駅舎用地買収と地域社会—小田原急行鉄道の事例—」『専修経済学論集』第48巻第2号, 2013年。なお、著者は同様のことを「京王沿線」の「あとがき」にも記している。
- (4) 大矢愨三子「江ノ島電線の近現代史」, クロスカルチャー出版, 2018年。
- (5) 「湘南の誕生」研究会編『湘南の誕生』, 藤沢市教育委員会, 2005年, 182-185頁。

(中牧 崇)

CPCリブレ No.6

エコーする(知)

小田急沿線の近現代史

永江雅和

いま、小田急沿線史がおもしろい!!

鉄道開発の根柢味がく人と土地を通じて味わえる、必読の一冊。そうだったのか、ODAKYU EXPRESS

クロスカルチャー出版

CPCリブレ No.6

エコーする(知)

京王沿線の近現代史

永江雅和

小田急に続く鉄道沿線史第2弾!! アメージングな京王線の旅—鉄道敷設は地域に何をもたらしたのか京王線の魅力をたっぷりと分かりやすく解説

クロスカルチャー出版

ISBN978-4-905388-83-8
C0021 ¥1800
定価(本体1,800円+税)

9784905388838
1920021018008

小田急沿線—それぞれの風景が窓外に広がるさあ、歴史の旅に出よう

【第1章】私鉄経営と沿線開発—「阪急モデル」と小田急— 【第2章】「副都心」新宿の形成と駅ビル建築— 【第3章】「ファッションの町」渋谷と代々木公園— 【第4章】世田谷の用地整理と「学園都市」成城の建設— 【第5章】「新しい市」と「新しい市街」— 【第6章】「生田村騒動」と向ヶ丘遊園— 【第7章】「新田町」と多摩ニュータウン— 【第8章】「川崎の町」— 多摩川と川崎— 【第9章】「東部」相模原・西側と林間郡誌記述— 【第10章】「あまのこ」と「あまのこ」— 【第11章】「あまのこ」の観光と小田急— 【第12章】小田急— 沿線の観光と交通— あとがき— 関連年表、参考文献付。

ISBN978-4-908823-15-2
C0021 ¥1800
定価(本体1,800円+税)

9784908823152
1920021018008

京王線—
モダンなボーダーが、つないでゆく、郊外へ、
すてきな旅はワクワク感たっぷり。

【第1章】京王沿線の歴史を知るためのキーワード— 【第2章】副都心新宿の形成と京王線— 【第3章】「新しい市」と「新しい市街」— 【第4章】「あまのこ」の建設— 【第5章】「あまのこ」の建設— 【第6章】「あまのこ」の建設— 【第7章】「あまのこ」の建設— 【第8章】「あまのこ」の建設— 【第9章】「あまのこ」の建設— 【第10章】「あまのこ」の建設— 【第11章】「あまのこ」の建設— 【第12章】「あまのこ」の建設— あとがき— 関連年表、参考文献付。